

「互いの愛、すべての人への愛とで、豊かに満ちるように」

( I テサロニケ 3 の 12 )

どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、

豊かに満ちあふれさせてくださいますように。

May the Lord increase and enrich your love for each other and for all.

キリストの弟子、パウロがとくに各地の信徒たちに対して願っていたことは、この聖句にあるように、愛であった。これは人間的な、生まれつきの好き嫌いの感情とは全く異なる愛であった。それゆえ、パウロは、主のはたらきがなかったら、そのような愛は有り得ないことを知っていた。それゆえに、「主がしてくださるように」との祈りをここで述べているのである。

だれでも、感情として好感を持つ人がいるだろう。そうした相手には自然に心が惹かれる。それをふつうは愛といっている。ほとんどの人は、親子、友人など子供から老人まで人生のなかで、そうした愛を感じてきたことだろう。

しかし、それはここで言われている愛とは大きくことなっている。ここでの愛は、無差別的なのである。すべての人とは、自分と出会う人はだれでも、ということで、よくない行動をする人、敵対する人、自分を侮辱するような人にまでその範囲は及んでいる。

このような愛に生きることは、キリスト者であってもそれはとても困難なことである。ここでいう愛とは生きたものであって、つねに相手がよりよくなることを思い続ける生きた心のはたらきを言うからであり、主イエスが言われたように、イエスに深く結びついていなかったら、(表面的にキリストを信じているだけでは)私たちは何もできない、そのような愛はとうていできないからである。

キリスト者の集會に集まる人がどんな人であっても、例えば、信仰を持ったすぐで異教の習慣から離れていない人、何らかの利得を目的としてキリストの集まりに入っているような人、自分が高ぶって上に立とうとする人、古い自分が消えていないために自分がしたことを吹聴するような人…さまざまの人たちが、最初のキリスト教の集まりには混入していた。そんなさまざまの人たちに対しても、愛をもって対することが言われている。

そうして、その愛をもって、キリスト者でない人たち全般に対してもかかわることが勧められている。どんな嫌悪を感じるような人に対しても、だれでもに同じように愛をもって対すること、それこそは神からの愛を豊かに受けているしるしと言えるだろう。

よい学校や会社に入るとか、知識を増やす、経済的に向上する、病気がなおるとか、家庭の問題が解決される、仕事でよく評価される、…等々、人間にはさまざまな願いがある。しかし、パウロが、そうしたことを越えて、最も重要なこととしてまたあらゆる状況にある人たちに最善のこととして願っていたのは愛であり、神の愛が人々の間に行き渡ること、それで満たされることなのであった。

その愛こそは、どんな状況にあっても、真実な人と人との結びつきを生み出し、弱っている人を励まし、また希望を与え、主の平安をもたらす力を持っているからである。



カラムツソウ 北海道 大雪山(黒岳) 2009.7.21

このカラムツソウは、大雪山(黒岳)の頂上に近いところに、純白の花びらが高山の清々しい大気と溶け合うように咲いていました。本州の高山帯と北海道の山々に咲いているもので、四国では見られない花です。かつて北アルプスに登ったときに、少しだけ見た記憶があります。しかし、この大雪山ではあちこちに、前回の「今日のみ言葉」に出したチシマノキンバイソウ(千島の金梅草)などとともに見られて、純白のアクセントを感じさせてくれたものです。

それは、神の国の一瞥をさせてもらったような感じで、地上であるような清い花畑は人の少ない北海道の山々が最もよく味わうことができるように思います。希望といのちのシンボルである緑の葉、そこから咲いた真っ白い花、それはいかなる汚れも感じさせない雰囲気があります。

人間はどんなに努力してもなお、罪のけがれから逃れることができず、それゆえにこそ私たちは、キリストが十字架によってそのけがれを清めてくださったことを信じて、清めを受けるしか道がありません。

しかし、こうした高山に太古の昔から咲き続ける植物は、はじめから神の国の清さといのちを持ち続け、それを訪れる私たちに静かに示しているのです。山そのものが神の力と永遠を語り続ける存在ですが、そこに厳しい寒さや積雪に耐えて咲く花は、揺るぎない山々の力のなかに、繊細さをたたえた存在で、神の大いなる奇跡というほかはありません。(文、写真とも T.YOSHIMURA)